

動物グループ

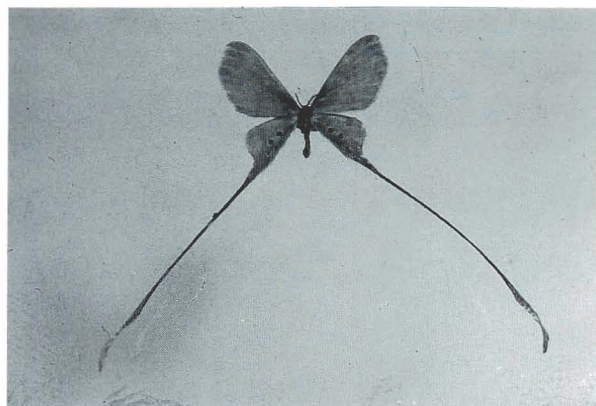
高桑正敏 (当館学芸員)

新しい博物館では、動物関係のスタッフも8名に増えました。専門分野別には貝類1、昆虫類2、魚類1、両生・は虫類1、鳥類1、哺乳類1、動物生態学1名となっており、この8名で動物に関する調査研究、資料収集・整理保管、展示、教育普及などの博物館活動を行っていきます。

調査研究活動：昨年度には当館の総合研究である県内のレッドデータ調査の結果をまとめ、県内外からの大きな反響がありました。動物は多様な生活様式をとっていて、その調査は一律にはいかず、困難な面が多いのですが、今後も県内の動物相の変化に目を向けていくつもりです。また、それぞれの分野の専門性を発揮して、学会から地域的な動物相調査まで、幅広く活動していきたいと思えます。

資料収集活動：これまでに収集した動物資料は、昆虫類の約12万点、貝類の約4万点をはじめに相当数に及びますが、今後も積極的に県民の財産として価値ある資料を収集していくつもりです。幸いにして、新しい博物館での

長い尾をもつように特殊化した昆虫のひとつ、リボンヤママユ (生命展示より)。



収集スペースも旧館とは比較にならないほど増大しました。未整理の資料も多いのですが、研究者の要望に応えることができるよう、少しずつでも整理していかねばならないと考えています。

展示活動：新しい博物館の展示テーマは「生命の星・地球」という、これ以上ない大きな課題です。生命展示室ではそれを哺乳類や霊長類、魚類、昆虫類の世界において、多様性という形で表現してみました。また、多様性を触ることで理解できる部分は、手で触れることもできるようにしました。フラッシュによる写真撮影を認めたことと併せ、博物館の理想的な展示の先取りをしたものと、ひそかに自負したいと思えます。なお、ミュージアムライ

ブラリーにおいては、神奈川の自然として鳥類、チョウ類、トンボ類の3分野が検索・照会できるようにしてあります。今後は、こうした分野にも力を注いでいきたいと考えます。

教育普及活動：新しい博物館独自の観察会や学習会をいろいろと企画しているところです。学芸員の専門性を活かし、県民の皆さんには楽しく面白く博物への関心が高まるように、また各分野の研究者にはより高度な興味を湧くように努力していくつもりです。具体的には県や博物館からの発信情報をご覧ください。

神奈川昆虫談話会

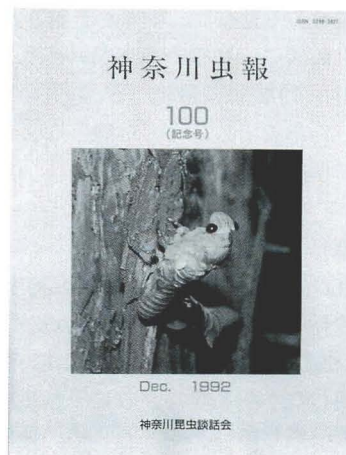
1954年に県立小田原高校の生物部のOBと部員が中心となって誕生、機関誌「神奈川虫報」が創刊されました。当初は湘南生物研究会昆虫談話会という名称でしたが、活動が全県下に及ぶに従い、1966年に神奈川昆虫談話会という会名に変更し、現在に至っています。事務局は個人宅を点々としていましたが、1987年からは県立博物館に置くようになりました。会員数はここ数年170-180名で安定し、年6回の例会を開催するとともに、「神奈川虫報」を年3-4号(計150-200頁程度)、連絡誌「花蝶風月」を年6回程度(計60-80頁)発行しています。日本でもっとも活発な活動を行っている昆虫同好会のひとつとされ、例会には常時25-40人程度が参加し、しばしば50名を越えるほどです。また、創立30周年を記念して「南

関東西端部昆虫相成因への試論」シンポジウム(大雪に見舞われたにもかかわらず100名以上が参加)や港南台高島屋における「神奈川の昆虫展」を開催したほか、県内産既知甲虫3000種突破(全国で初めての快挙)記念の祝賀会の開催、さらには35周年記念として会員内外からの新種記載論文多数を含む「神奈川虫報」記念号(256頁)を発行したり、「神奈川虫報」100号では県内の昆虫だけを扱った記念号(164頁)とするなど、全国に注目される事業を行ってきています。このために1992年には、安藤為次記念財団から記念賞を授与されました。

この会での悩みは、会員の高齢化。現在は40代以上が大多数で、30代以下は非常に少なく、10代に至っては0人という有様です。昆虫相を解明したり、その変遷を追ったりするためには、若いうちからの経験が必要なのですが、こ

のままではやがて会活動が低下せざるをえないと憂慮されています。とくに若・低年齢の方々の入会が期待されています。

連絡先：当博物館内
高桑正敏・苅部治紀



機関誌「神奈川虫報」。